

オットー・ノイラート覚え書き(1)

後 藤 邦 夫*

ウィーン学派や論理実証主義については、一通りのことは知っているつもりだった。ところが、ある偶然の出会いから、私の知識をもう一度整理・補強する必要性に気付いた。後で言及する塩沢由典氏のケースなどを例外として、この種の話題について、日本では必ずしも十分な紹介がおこなわれていなかったという印象である。ボストンやウィーンの人々の間では周知のことでも、あらためて整理された知識を伝達することは必要だろう。ポスト冷戦の状況の中で初めてわかったこともある。厳密な議論をする前段階の作業として、とりあえずエッセイ風の研究ノートとして書き始めることにした。

(恩師に当たる人々をも含め多数の人名が登場するが、すべて敬称を省略する。)

第一章 発端としての出会い、そして回想。

1. 1 「君はノイラートを知っているだろう」

1991年の11月、在米中の私たち（桑原と後藤）はボストン大学の神学部哲学教室を訪れた。そこには「アインシュタイン研究センター」があり、ロバート・コーエンがそのボスである。彼の名は継続的に刊行されている *Boston Studies for Philosophy of Science* の編者として知られている。

* 本学文学部

キーワード：オットー・ノイラート，論理実証主義，ウィーン，科学哲学，オーストリア第一共和国

私の目的はある資料についての情報を得るためであった。ボストン大学のセンターではアインシュタイン全集の編集が進められており、そのために、各地に散在する資料類のコピーが集められている。私が探していたのは、アインシュタインが一般相対性理論を出したあと、1917年に発表した量子論に関するある論文である¹⁾。発表後、あまり話題にならず彼自身もそれ以上は追求もしないうちに、1925年以降の量子力学の完成と発展とともに、ほとんど忘れ去られた孤立した仕事である。しかし、最近になって「カオスと量子論」という先端的なテーマにつながる時代に先駆けた考察として注目を集めるようになった。今では1998年に刊行された全集第6巻に収録されて誰でも読むことができる。しかし、80年代の日本で私はその論文を収録した雑誌を探しあぐねていた。もちろん、日本で出た日本語訳選集にも収録されていない。とにかく原論文を読まなければ何事も始まらない。そこで、私はMITで開かれた学会に出張した機会にセンターでその論文のコピーをもらい、出来ればメモや手紙などから関連のある情報を得ようとしていたのである。

目的は半ば達成されたにとどまった。論文のコピーは直ちに入手できたが、なぜこの時期にアインシュタインがそのようなこと考えたか、という謎を解き明かすような資料は、少なくともそのときは見つからなかった。その問題はこのノートの主題ではないので別の機会に譲り、本題に戻ろう²⁾。

センターの若手研究者が資料を探してくれているあいだ、私たちはコーエンと向かいあってよもやま話に時を過ごした。彼は物理をバックグラウンドとする科学哲学者で、マルクス主義者を自任している³⁾。話がマルクス主義や物理に向かったのは自然であり、坂田、武谷の理論から毛沢東へ、さらに私の学生時代の師の高林とフランスのマルキスト、ヴィジェの近況まで、話題は尽きなかった。来年（1992年）の4月、「自然科学とマルクス主義：批判的考察」というテーマでワークショップをやるから来ないか、というのが彼の誘いであった。私は快諾した。（約束どおり1992年4月、私たちはオースティンからボストンへ飛んだ。その会に出席し、さらにトーマス・クーンに会うために。縁多く広大な多くのアメリカの大学キャンパスとは違い、電

車道とチャールス川の間に長く延びるボストン大学のキャンパスは、一昔前の神田・御茶ノ水かいわいの大学を思わせる。大学の研究室や学生寮が隣接するアパート群を蚕食してさらに細長く延びる辺りに、批評誌 *Partisan Review* 編集部の看板が出ていた。「アインシュタイン研究センター」も電車を降りて道路に面した神学部の古い建物の階段を上がればすぐの所にある。）

私は次のように語った。自然科学とマルクス主義について理論的に論ずるのもよいが、マルクス主義者と自己規定する科学者の仕事や行動を社会的コンテキストの中で調べてゆくほうが生産的ではないか。たとえば、日本では1940年代の彼らの行動を、弾圧、戦時下の消極的抵抗、戦後の活躍などを一連の社会史として見る事が出来る。彼は賛成し、ぜひそれを書け、英語は自分が直してやるといった。（私はまだその約束を果たしていない。しかし、日本で書いたものの中にいくらかはその趣旨を反映させている。）

私が戦時下の日本で「牢獄の外にあった」マルクス主義者の行動をいくつかに分類し、技術論論争、マニュファクチャ論争、地代論論争などの精緻な議論に沈潜してゆく生き方とともに、戦時物動計画、統制会、満鉄調査部などで「計画経済の実験」に参加した人々の存在について語った。マルクス主義者が戦時中に技術論を展開した話題を語ったとき、「武谷は技術についても論じていたのか」とコーエンがつぶやいた。さらに、私に問うたのであった。「計画経済か。君はノイラートを知っているだろう。」私はとっさには議論を返せなかった。もちろん、ある程度のことは知っていた。第1次大戦下のオーストリア・ハンガリー帝国でその才能を戦時計画経済に生かし、その計画経済の知識を短命に終わったバイエルン・ソビエトのために役立てようとして挫折、投獄される。ソビエト政権の幹部が殺され、逮捕・粛正される中で、マックス・ウーバーの弁護、オットー・バウアーによる救援活動でオーストリアにもどり、「赤いウィーン」の労働者達のために、社会民主党の学習会や成人学校、博物館などで活動。傍ら、ウィーン大学の数学教室の木曜例会、すなわちやがて「ウィーン学派」となる研究会に参加。カルナップとともに「ウィーン学派宣言」を起草、論理実証主義左派の論客として活

躍。アイソタイプの普及のためにモスクウを訪問中に、ウィーンは右翼に制圧され、逮捕を逃れるためそのままオランダ、そしてイギリスに亡命。オクスフォードを拠点に「統一科学百科全書」や「アイソタイプ」のために活動。1945年急死。

日本へ帰ってから、ある仕事の帰りのタクシーの中で、コーエンとの一件を塩沢由典に話したことがある。早速彼が送ってくれたのは、岩波講座『現代の社会科学』のために書かれた論文のコピーであった。パレートやバローネにはじまり、ランゲ、ハイエク、ミーゼスらが登場する「社会主義経済計算論争」を計画経済の破綻とソビエトの崩壊の文脈を踏まえて改めて論じたものである。そのなかで、塩沢はスターリン主義とは対極にある知識人ノイラートがバイエルン・ソビエトにおける計画化の実践に参加し、実物経済における計画化への強い信念を堅持したことを、その経過の説明とともに、彼の「物理学主義」との関連で論じている。出色のノイラート論である。しかし、紙数と文献の制約によって、ノイラートと彼を取り巻いた当時のウィーン学派の群像の思想と実践について立ち入ることにはなっていない⁴⁾。

後でわかったことだが、1991年はカルナップ、ラインヘンバッハ、ツイルゼルの生誕百年にあたり、10月の1日から4日まで、「ウィーン・ベルリン・プラハ——科学的哲学の興隆」という国際会議がウィーンで開かれ、その第3日の10月3日に Wiener Kreis Institut が結成されたのであった。コーエンは私たちと会う一月前に出席していたのである。(後に私は Wiener Kreis Institut に入会し、多くの知見を得ることになる。)⁵⁾

1. 2 名古屋大学物理学教室にて

学生時代から私はマルクス主義だけでなく論理実証主義についても学び、彼らの哲学研究と相対性理論や量子力学との関連についての知識は、同世代の中では、ある方だと考えてきた。しかし、彼らの社会的実践と理論的活動との関連について十分な研究や分析を行ってきただろうか。マルクス主義と科学について私自身がコーエンに語ったように、「物理学の革命」だけでな

く、「中欧・オーストリアの革命」についても自己の知識を深めなければならぬまい。

そのように考えるうちに、この何十年間の雑然とした個別的な見聞がある秩序をもって記憶の底から現われてきたのである。

当時の多くの日本の知識人の卵たちがそうであったように、敗戦直後の高校の寮で出会った『唯物論と経験批判論』（1909）がひとつの出発点であった。1948年であったと記憶する⁶⁾。ウィーン学派の「マニフェスト」が出たのは1929年であるが、レーニンのこの本が出版された前後、1906年から1912年にかけて、後に「第一次ウィーン学派」と呼ばれることになる活動がエルンスト・マッハの周辺で起こっていた。そのなかで、ボルツマンの弟子で物理の私講師だったフィリップ・フランクはマッハとポアンカレの影響下で1907年「因果法則と経験」を書いた。この論文は直ちに二人の重要な読者を得た。それを読んでフランクの友となったアインシュタインと、早速取り上げて批判したレーニンである。

レーニンの目的はボグダーノフの影響を受けた党内の一派との政治闘争に勝つことであったから、マッハやボグダーノフの思想が主観的観念的であることを論証し攻撃した。また、当時の指導的科学者、ヘルムホルツやポアンカレの知的権威を「大科学者にして小哲学者」の言説として退けた。そのかぎりではレーニンは成功した。しかし、すでに『力学史』の訳書を神田の古書店で見つけて多少は読んでいた私は、これでマッハの科学思想が克服されたとはとても思えなかった。当時の友人の回想によると、私はその種の不満を漏らしていたらしい⁷⁾。

1950年に大学へ進んで物理を始めた私は結核を病み、休学中の1952年に「百万人の数学」や「市民の科学」で知られる進歩的科学者ランススロット・ホグベンが書いた“*From Cave Painting to Comic Strip*”を読んでいた。「マリア・ノイラートの見事なコラージュに、私はただ文章を付け加えたに過ぎない…」、「このような書物を世に送ることが出来たのは、マリアの夫であり、私の友人だった真の天才、故オットー・ノイラートのおかげである…」

著者ホグベンは確かに書いていた。美しい本だった。標題どおり、アルタミラ洞窟の絵画から現代のアメリカの4コママンガに至るさまざまな画像が各ページにちりばめられていた。(今は手元にない。多分名古屋大学のどこかに埋もれているのだろう。)ただ、当時の私にはホグベンの英語を読むのは楽ではなかった。かなり後になって、「英語青年」で寿岳文章、林達夫、南博らによる訳業が進んでいるという記事を読んで大いに期待したが、訳書を手にして「 MARIA・ノイラートの見事なコラージュ」がすべて消え失せ、ただホグベンの文章だけが『コミュニケーションの歴史』として訳出されているのを見た。そのときの失望と怒りは忘れられない。まさしく「絵を消したマルチメディア芸術」を見せられたのだった!⁸⁾

同じころ、フィリップ・フランクのアインシュタイン伝が邦訳・出版された。1914年にアインシュタインがチューリッヒに移ったとき、プラハのカルロス大学における後任としてフランクを推薦した。このフランクのアインシュタイン伝は相対性理論をマッハのプログラムの実現として描き、ナチとスターリン主義者の双方のアインシュタイン非難を記録している。(ソ連はその後態度を変えたが、ナチは変えなかった。)

1954年であっただろうか。イギリスの論理実証主義者エイヤーに学び、LSEから帰ったばかりの市井三郎を名古屋大学の高林武彦の研究室に招いて話を聞く機会があった。(「民科」の行事のひとつとして企画され、事務は私の仕事だった。)ヘーゲルの「大論理学」における「弁証法」の核心部分の命題が「言語とメタ言語の意識的混用による論理の誤謬」である、という主張を市井は展開した。(その後「思想」に掲載。)ヘーゲルに詳しい菅原仰もいて議論は活発だった。素粒子論研究室の山田英二の評によると、「ヘーゲル擁護派は碁盤の各所で大いに改めまくり石と地を奪ったが、終局後に勘定してみると市井さんの一目勝ちだった。」場所を近所の喫茶店に移し、労働党治下のイギリスの状況について話を聞いた。「バートランド・ラッセルが対ソ予防戦争を主張した」という当時日本の一部に流れていた風評について市井三郎は怒りを込めて否定した。市井の怒りは深く、ラインヘンバッハの

『科学哲学の形成』⁹⁾を訳出、出版したとき、「訳者あとがき」でこの件について憤激の文章を書いている。論理実証主義がスターリストによる「主要打撃」の対象になっていたのであろう。

同じころ、卒業をひかえた正月、先輩達とともに、ヨーロッパから帰って間もない坂田昌一の自宅を訪れた。坂田は私に一つの抜き刷りを渡した。

“Strife about Complementarity”という題名で、コペンハーゲンで著者のローゼンフェルトからもらったものだという。私はすでに、同じ理論物理の研究室でも坂田が主宰するE研ではなく、高林武彦を中心とするW研に進むことに決めていたので、坂田は、自分の研究室に來ない学生の私に、W研にふさわしい論文を回したのだと思う。(半年後、この論文は、坂田、小此木、後藤の訳で岩波の雑誌『科学』に二回にわたって掲載された。翻訳とはいえ、学術誌に私の名前が載った最初のケースである。)¹⁰⁾

ローゼンフェルトはマルクス主義者としてボーアの量子力学解釈(相補性の原理)を弁証法的思考の模範と見なして擁護していた。当時、ソビエトの哲学者や科学論者は、ボーアの解釈を「コペンハーゲンの観念論」として批判し、デヴィッド・ボームが提出したばかりの形式とその因果的解釈を評価していた。ボームの形式は1928年のド・ブロイの形式の復活であり、アインシュタインが支持したと伝えられていた。高林は、これとは独立に、同様の形式をより洗練して提出したが、それを因果的解釈と結び付けることには賛成していなかった。(この形式自体は量子カオスとの関連で現在も時折話題になる。それらの議論については別の機会に譲る。)マルクス主義者ローゼンフェルトは、ソビエトの「正統派マルクス主義」の攻撃からコペンハーゲン解釈を守るとともに、彼らを機械論的唯物論者として批判していた。そこには次のような註記があった。「レーニンの政治的パンフレット『唯物論と経験批判論』の機械論的性格については、よく知られたパンネクックの『哲学者としてのレーニン』を参照せよ。」(後に、同様にナチ占領下で地下活動をしていた物理学者パイスは「ボーアとトロツキを足して二で割るとローゼンフェルトになる」というパウリの言葉を紹介している。)

坂田もやはりマルクス主義者であった。同時にボーアの解釈を基本的に信じていた。(坂田の量子力学の講義を聴くことが私の名古屋行きの動機のひとつであった。それは「不確定性と相補性」という章を含み、すくなくとも1950年代の講義ではボーアの「相補性原理」はアインシュタインの「相対性原理」と並ぶ物理学の基本原則とされていた。) その意味でローゼンフェルトは「同志」であったと思われる。

一方、坂田は『唯物論と経験批判論』を高く評価していた。とくに「一個の電子といえどもそれを汲み尽くすことは出来ない」という一句を好んだ。坂田の研究を主導した「階層性の主張」はこの言葉によって補強されていたと思われる。ローゼンフェルトの表現は気掛かりであったに違いない。坂田は「この本についてなにか知っているか」と問うた。もちろん、私は『共産主義の左翼小児病』のなかにレーニンの敵役として登場する天文学者にして左翼共産主義者であるこの人物の名前だけは知っていた。(パンネクックの天文学史は桃山学院大学図書館にある。) しかし、『哲学者としてのレーニン』を私が手にしたのは1970年代も半ばになってからである。坂田はすでに死去していた。

直接の師である高林は『唯物論と経験批判論』をどのように評価していたのであろうか。私の質問に対する答えを記憶している。「自然科学のアマチュアの仕事としては、とくに後半は、なかなかよく書けている。」というのであった。スターリンはすでに死んでいたがスターリン批判はまだ始まっておらず、『唯物論と経験批判論』が公認のソ連共産党史で「ボリシェビズムの理論的基礎」とされていた時代である。かつて詩人を志した高林の「プロとしての自信」に裏付けられた自由な精神は魅力的であった。

卒業して大学院に入った私は、統計力学に関するエーレンフェスト夫妻の古典的総合報告を読む傍ら、高林が次々と手渡すドイツ語の論文を読んでは報告させられていた。(その多くは写真コピーであり、高林が手書きで写したものもあった。) そして、ボームの『量子論』の翻訳を手伝った。また、偶然入手したライヘンバッハの『量子力学の哲学的基礎』と格闘した¹¹⁾。私

が手にしていたのは1949年出版のドイツ語版である。この本は元来はカリフォルニア大学出版局から英語で出たものであるが、ドイツ語版を出すに当たって、ウォルフガング・パウリのコメントに基づく補論が加えられていた。物理の関係者にとっては仮借ない審判者パウリの権威は重要である。そのコメントは、いわばライヘンバッハの書物が読むに値する認証を得たことを意味した。大学を出たばかりの私にどれほど理解できたかは疑わしい。ただ、ライヘンバッハにとって「哲学的」というのは量子力学的命題の構造が三値論理学の体系によって表現できるという意味らしいということはわかった。哲学の機能をそのように限定してしまうのは確かに問題である。しかし、『科学哲学の形成』のなかで、大学で哲学を学んで人生の指針を得ようなどと思っはならぬ。シェイクスピアを読むか労働運動に参加したほうがよい。と喝破した「哲学者」ライヘンバッハには一種の爽快さがある。プラトンもヘーゲルも、多少とも権威と反民主主義の傾向をもつ思想家を彼は仮借なく攻撃した。(そのラインヘンバッハがベルリンからウイーンに来て「科学的哲学」の必要を説いたとき、「哲学だって？君が言うのは科学的神学ではないのか。」と返した人物がいた。ノイラートである。)

それからしばらくして、ジャン・ルイ・デトゥーシュとポーレット・ファブリエという元夫妻の一組の学者が日本にやってきた¹²⁾。名古屋では、ファブリエがポアンカレについて、デトゥーシュが彼自身の量子力学の新解釈についてセミナーを聞いた。丁度、高林はパリに滞在中であったため、坂田は私に出席するように命じ、「高林のコラボレータである」と紹介した。なにかコメントしなければならない所へ追い詰められた私の発言は冷汗ものであったというほかはない。(それにデトゥーシュのフランス訛りの英語はとてもわかりにくかった。私はひたすら彼の論文の別刷りの中の数式だけを追っていたに過ぎない。)

しかし、量子力学の解釈についての坂田の見解はこのセミナーのあと、微妙に変化したように思う。坂田はすでに述べたようにコペンハーゲン解釈の強固な信奉者であり、しかもそれが彼のマルクス主義と一致するとしていた。

したがって、ボームのものを含む非コペンハーゲンの解釈に対しては非寛容であった。デトウーシュの来日のあと、その非寛容さが少し緩んだように思われたのである。他方、ウィーン学派の量子力学解釈を坂田が評価しているということも伝えられた。ただ、坂田自身の口から聞いた記憶はない。

1. 3 1970年代

高林が2年半に及ぶフランス滞在を終えて帰国し、私が大阪で就職し、坂田が病に倒れたころ、ヨーロッパとアメリカ、そして日本で60年代末の新左翼学生運動の高揚があった。そのころ、世界中で活発な出版活動がなされた結果として、『哲学者としてレーニン』を私は入手した¹³⁾。それだけでなく、パンネクックを含むベネルックスの社会主義者に関する情報も入手できるようになった。『哲学者としてのレーニン』のなかの最も重要なレーニン批判の章がカール・コルシュの協力によるものであることもわかった。また、レーニン自身が、ジュネーブ時代にはじめてヘーゲルを読んで、それ以前の自己の知識の不足を反省していたのであった。(もちろん『唯物論と経験批判論』はジュネーブ亡命以前の著作である。)

そして、「マルクス主義の知的氷河時代」には容易に目に触れることがなかったさまざまな知的・政治的活動の成果が知られるようになりつつが、そのなかで最も目立ったのは、フランクフルト学派の流れを汲んだ思想潮流であった。とくに、マルクーゼが1930年代にさかのぼって再評価され、「近代の科学技術はその存在自体において権力的で抑圧的である」というテーゼが、ベトナム反戦運動と公民権運動を闘うアメリカの学生達の心を捉えていた。1960年代のアメリカの研究大学は、巨額の軍事費から派生した潤沢な研究費によって繁栄していたのであるが、そのような大学における「厳密な成績評価」は、当時の選抜徴兵制度のもとでは、「ベトナム行き」のための選別システムとして機能した。マルクーゼの指摘はアメリカの学生たちにとっては彼らの日常性の中での出来事にほかならなかったのである。「生産力の増大」という前提をマルクス主義から取り去ってしまえ、というコルネリウス・カ

ストリアディスの議論さえ翻訳紹介された。

このとき、アメリカの学生や若手研究者の間では、もうひとつの科学論が流行していた。いうまでもなく、クーンの『科学革命の構造』におけるパラダイムの概念である。クーン自身の思惑を超えて、この書物は、「唯一の科学的真理の追究」と「技術進歩に基づく社会の発展」を自明とする啓蒙的史観を一挙に相対化する契機として機能した。すでによく知られていることであるが、「反証可能性」の基準によって科学と非科学の間に厳密な一線を引いたポパー流の科学哲学者からの批判は厳しかったが、カルナップはクーンを高く評価した。ノイラートの遺志を継いで、カルナップらがシカゴ大学出版部から出した「統一科学百科全書」の第2巻に『科学革命の構造』が収録されたのは偶然ではなかったのである。「クーン以後」の科学論の世界における論理実証主義の退潮をうんぬんする論者は多い。たしかに、叛乱する若者の間で人氣が薄れ、あまりにもアカデミックになったという意味では、「マニフェスト」¹⁴⁾の時代の破壊力を失ったといえるかもしれない。しかし、学問として衰退したというのは正確ではないだろう。

そのころ、鶴見俊輔から突然の電話があり、私は、研究社が企画した『講座コミュニケーション』の第2巻の『コミュニケーション史』に「マスコミの世界史」という大変なテーマの章を分担した¹⁵⁾。1973年に出版されたその巻の序論「コミュニケーション史へのおぼえがき」で鶴見は、先に言及したホグベンの“*From Cave Painting to Comic Strip*”とノイラートを取り上げた。鶴見はノイラートを高く評価し、「大衆運動に関心を持つ点で珍しい位置を占め」、ウィーン学派の運動の中でやがて孤立していった人物であるとした¹⁶⁾。

私は鶴見のノイラート観にある程度は同感する。しかし、冷戦初期のマッカーシズムが横行したアメリカでアカデミアの主流となっていた人々がすべてノイラートから離反したとは考えていない。ウィーン学派は思想的にも多様であり、彼らを結びつけていたのはウィーン時代の新たな学術的活動の中で培われた人間的な連帯であった。したがって、思想的には「右派」のカー

ル・ポパーは、有能なオルガナイザーで「最左派」のノイラートに対する回想を次のように結んだのである。「じつに多くの、そして真に重要な諸問題について、私たちの意見の不一致はまことに深いものがあった。にもかかわらず、彼に対する私の感情はかわらない。彼は私がこれまで会った人々の中で、もっとも優れた人格者であり、真に独創的な思想家であり、よりよい世界、より人間的な世界を夢見て屈することなく闘う人であった。」¹⁷⁾

私自身は啓蒙主義には批判的であり、ヘーゲルとフランクフルト学派に親近感をもち続けてきた。しかし、人がある思想を自己のものとしたとき、絶えざる自己対象化と自己検証なしには、その思想を正しく保持することは出来ず、硬直化した思想の壁の中の囚人となるほかはない、と私は思う。したがって、20世紀における最良の啓蒙主義者であり、オーストロ・マルクス主義の系譜を引く最高の理論家、実践家であったノイラートと向き合うことが、啓蒙主義に批判的な私の思考のエネルギーの源泉となるのである。

第2章 ウイーンとウィーン大学

2. 1 ウイーン＝矛盾の首都

「皇女エリザベート」の評伝が日本で多少評判になったおかげで、二つの大戦をはさんだ小国オーストリアの厳しい政情やカール・レンナーをはじめとするオーストリア社会民主党の指導者達の名も日本人の間でもいくらかは知られるようになった。しかし、私たちがウィーンにたいしてもつ平均的な第一印象はシューベルトやベートーベン、シュトラウス父子の名と結びついた「音楽の都」であり、クリムトやシュニッツラーの「世紀末芸術」であろう。本稿の主題である研究者や思想家については、マッハ、ボルツマン、フロイド、メンガー、ケルゼン、ヴィトゲンシュタイン、そしてウィーン学派が直ちに思い浮かべられる。そして「ウィーン学派」とはいつても、彼らはウィーンの学界や思想界で占めていた地位については、すでに多くの人々が知っている。その業績はすばらしく、国際的に注目を集めたが、同時に彼等は少数派であり、異端であり、時には危険分子として疎まれた。34年2月の

ドルフスのクーデターに始まるファシズムの進出によって、彼らとその影響下に形成された「学風」はウイーンから一掃されたのである。スターリズムからも彼らは「社民勢力」の一翼として「主要打撃」の対象となった。そして、先に述べたように、Wiener Kreis Institut が「ウイーンで」結成されたのは1991年である。

11の民族を統合したハプスブルグ帝国の首都ウイーンには、ドイツとの文化的一体性を追求する大ドイツ民族主義への憧憬とともに、金融や近代産業の分野で力をつけてきたユダヤ人への反感が幅広く存在した。(ドイツ民族主義と反ユダヤ主義を一身に体現したオーストリア人かというと、直ちに思い浮かぶ名前はアドルフ・ヒトラーである。)そして、ウイーン学派の中心人物のほとんどが「ドイツ系」の「ユダヤ人」であった。

ハプスブルグ帝国末期の首都ウイーンとそこに住む人々、とくに知識人達の存在それ自体における矛盾については、トゥールミンとジャニクの『ヴィトゲンシュタインのウイーン』が活写している¹⁸⁾。彼らの狙いは、ヴィトゲンシュタインの哲学を単に彼のテキストに即して語るだけではなく、カルル・クラウスの『炬火』に象徴されるようなウイーンの現実と一体的なものとして、即ちこの芸術と科学の才に恵まれた富裕なユダヤ人実業家の家族の一員で肉体労働をことのほか尊んだ天才的哲学者の行動と思索を「ひとつの現象」として描くことであった。

たしかに、ハプスブルグ帝国が広大な版図に11もの民族を独裁的な政治体制のもとに統合しえた背景には、オスマン・トルコというもうひとつの帝国と対峙し、東方の脅威に対してヨーロッパを防衛するという理念があった。この状況は、つい10年前までわれわれ自身が体験していた「冷戦構造」を思わせる。冷戦の終結にともない、きわめて強固に見えた体制がまことにあっけなく自壊し、そのもとで凍結状態にあった「歴史」が民族紛争や宗教的原理主義の対立という現代のもっとも深刻なテーマとして噴出したことをわれわれは眼前にしている。同様に、18-19世紀にかけて、ヨーロッパの現実の変化のなかで、「両帝国間の冷戦」は次第に風化してゆき、帝国の解体が少

しづつ、しかし着実に進行した。そして、メッテルニからフランツ・ヨーゼフにいたる強権的体制が19世紀末に向って弱体化・形骸化してゆくに従い、帝国の周辺部ではセルビアを先頭とする民族主義運動が昂揚し、帝国の中心部では西欧的文化がらん熟しつつあった。すなわち、ウイーンという独裁国家の政治的首都では、強権的な統治システムとそのイデオロギー装置とが、成熟した西欧的「世紀末文化」と「共存」するという状況が見られたのである。

2. 2 大戦の敗北と帝国の解体¹⁹⁾

第1次世界大戦がセルビア民族主義とハプスブルグ帝国主義の間の紛争から始まったことは誰知らぬものはない歴史的事実である。その結果は、1300万人の戦死者とドイツ、オーストリア・ハンガリー、ロシア、トルコにおける「帝国の解体」であった。そのなかでも、革命や暴動を伴った他のケースと異なり、「権力の消滅」あるいは「帝国の蒸発」がハプスブルグ帝国の終焉の姿であった。オーストリアでは臨時国民議会が放棄された権力を継承し、社会民主党右派のカール・レンナーを首班としビクトル・アドラーを外相とする挙国一致政権が成立し、共和国宣言、新憲法制定へと進んだ。ただ、ほとんどの党派や政治家にとって、この事態は予期せざる展開であった。ある程度予測していたのは、オットー・バウアーを中心とする社会民主党の左派グループだけであったといわれる。しかも、国際情勢は新国家にとって苛酷であった。

敗北にともなう大戦末期の混乱のなかで、かつての帝国の中から「民族自決」のスローガンに乗って巧みに戦勝国の側に回った「民族国家」が続出する一方で、縮小されたオーストリアとハンガリーだけが敗戦国としての苛酷な運命を負うことになる。ロイド・ジョージ内閣の閣僚として戦後処理に当たったウィンストン・チャーチルは同情を込めて書いている。「オーストリアは最後の残り物である。ハンガリーとともにオーストリアは栄華を誇ったハプスブルグ帝国の汚名と重荷を全部背負わされたのである。その結果オー

ストリアはウィーン付近とアルプス山地における6百万の人口からなる国に縮小され、その中央に2百万の帝国首府を擁した見るも憐れな国家となった。」さらに、多くのドイツ系住民が期待した「民族自決」=「ドイツとの大合同」はフランスの強硬な反対を招き「国際連盟の満場一致」を要すると決められて事実上禁止され、しかも崩壊寸前の小国家にハプスブルグ帝国全体の賠償金まで課せられようとした。チャーチルは書いている。「もちろん、かかる不合理なことが、適用されよう筈がなかった。しかし、不必要な危険な渋滞が起こってきた。即ちオーストリアの完全な財政的崩壊が起こってきたのであって、さらに起こった社会的崩壊は主としてバルフォア氏の提唱による国際連盟の干渉によってわずかにのちに至って回避されたのである。』²⁰⁾

ここでチャーチルが「回避された社会的崩壊の危機」と呼んだのは、1918年11月のババリア・ソビエト共和国成立、1919年3月のハンガリー・ソビエト共和国成立、という潮流にオーストリアが加わり、ソビエト連邦の中欧への展開という事態に発展することであったと思われる。しかし、オーストリアの社会民主党は、コミンテルンやハンガリーのベラ・クーン政権からの強い要請にもかかわらず、ソビエト政権への精神的な支持と連帯を表明するにとどまった。右派のレンナーだけでなく、急死したビクトル・アドラーの後を継いで外相となった左派のオットー・バウアーも最左派のフリードリヒ・アドラーも、チャーチルのいう「見るも憐れな国家」がソビエト体制に移行した場合、経済は崩壊し、連合軍に全国土が簡単に占領され、新憲法下でようやく獲得した労働者や市民の権利さえも消滅すると考えたのである。

当然のことながら、コミンテルンは反発した。あらゆる種類の非難がオーストリア社会民主党と「カントとマッハによって歪曲されたオーストロ・マルクス主義」に浴びせられた。

しかし、オーストリアの社会民主党自体が、どこにも見られた左右の対立のほかに、その結党以来ハプスブルグ帝国に固有の複雑さを反映するもうひとつの対立軸を抱えていた。国際主義と民族主義の相克である。党が国際主義を強調すると、国際的帝国であるハプスブルグ体制の固定化につながると

帝国内部の他民族の反体制派から批判される。民族主義に理解を示せば、当時のオーストリア人の多数派の民族感情である大ドイツ主義に傾斜せざるを得ない。事実、ヒトラーのオーストリア合併に際して、社会民主党内にはあいまいな立場をとる部分が存在した。

しかも、分裂の回避はこの党の至上命題であった。したがって、「プロレタリア独裁はロシアでは必要であってもオーストリアの労働者は受け付けない」点で一致していても、党内の多様な意見の分岐の調整が必要であり、変化する状況への素早い対応を行うことは困難であった。オットー・バウアーを中心とする左派の「ブルジョア政党との連立は党の原則に反する」という方針を党大会において多数で決定し、社会民主党は「抵抗する強力な野党」となるべく1920年に政権から離脱する。そのとき以来、党は戦闘的な言辞によって部分的改良を勝ち取ることを方針とするようになった。(この複雑な党内問題が解決され、独立国家オーストリアの「社会党」としての性格を確立したのは第二次大戦後である。)

この点は、スターリンの支配が確立する以前のコミンテルンではある程度は理解されていた節がある。1926年にヴァルガの編集で出されたヨーロッパの社会民主党に関するレビューにおいても、この複雑な立場は明確に確認されている²¹⁾。この本が出た1926年にはスターリンの支配は未確立であり、ヴァルガの序文も、社会民主主義政党を一般的に批判するのではなく、各党の特徴を具体的に明らかにすることの必要性を強調している。オーストリアの社会民主党が労働組合ばかりでなく、サッカーやサイクリングのクラブを含む多数の市民組織に基盤を持つ、人口600万の国家のなかで50万を超える党員を擁する大政党であって、徹底した福祉政策によって支持を増やしているという記述が、紋切り型の社会民主主義批判と共存している。

ただ、ムッソリーニやヒトラーの台頭によるファシズムへの危機に際して、このような党派が有効に対応できるか、という疑問は当然存在した。第1次大戦中、独立社会民主党のメンバーで兵士委員会の代表であったカルナップが、あくまでも社会民主党の方針に固執するノイラートを批判し、共産党へ

の傾斜を強めていたことが後に公開された日記に示されている。事実、ファシズムに対する有効な闘争を行えないままに、社会民主党とその武装組織である共和国防衛同盟は1934年のドルフスのクーデターにおいて敗北し、党は多数の犠牲者を出して非合法化された。ただ、この敗北が絶望的な状況で闘いから逃げなかったウィーンの労働者の名誉を守ったことは確かである。荒畑寒村は労働者アパート「カール・マルクス・ホフ」に立てこもり、銃撃戦の末に敗北した労働者たちについて感動を込めて語っている。(この建物は今も残っており、その前に立つことが寒村の願いであった。)²²⁾

このとき、社会民主党系の思想団体として閉鎖・非合法化されたのが「エルンスト・マッハ協会」である。協会はウィーン学派の主要な支柱のひとつであった。モスクウに出張していたノイラートは逮捕を避けるためウィーンには戻らず、直接プラハに向かった。そこで逃れてきた妻子と落ち合い、オランダに亡命する。(カルナップはすでにフランクとともにプラハにいた。彼は1935年にアメリカに移る。) エルンスト・マッハ協会が解散させられたあと、非政治的なシュリックを中心に研究活動は続いたが、そのシュリックも1936年に暗殺される。そして、1938年のヒトラーのオーストリア併合ですべてが終わった。

2. 3 ウィーン大学とウィーン学派²³⁾

帝国のイデオロギー的支柱であったカトリシズムは政治の世界をも支配した。その影響は学界にも及び、ウィーン大学、とくに新トマス主義神学の拠点であった哲学部は知的反動の拠点でもあった。そこでは、新カント派を中心とするドイツ観念論までが許容範囲であって、論理実証主義が入り込む予知はほとんどなかった。その傾向は第1次世界大戦の敗北で帝政が崩壊し、社会民主党主導の政権が成立したあとも基本的には変わっていない。したがって、ウィーン学派の活動は、社会民主党の運動に協力的だった数学科の教授オットー・ハーン(ノイラートの二人目の妻オルガの兄)が数学教室の一隅で開いた木曜例会のほかは、主として大学の外部で営まれるほかはなかつ

た。

もちろん木曜日の会とその後のカフェでの会話がどれほど実り多いものであったかは、多くの回想記が示すとおりである。ゲーデル、タルスキー、ウィトゲンシュタインも出席したこの会では、数学、物理学、言語学の現代的テーマが取り上げられて熱心に議論された。

大学にも数少ないいくつかの例外ケースはあった。19世紀末のウィーンを代表するエルンスト・マッハの講座がそれである。プラハから移ってきた実験物理学者エルンスト・マッハは公然と無神論と社会主義を唱えた希有の存在であったが、学者としての盛名のゆえに地位を保つことが出来た。マッハの講座の後継者はやはり著名な物理学者ボルツマンである。彼は1906年に自殺した。彼が書いた「一物理学者のエルドラド」には、その彼が当時発足間のない無名のスタンフォード大学に講義に招かれたときの解放感に溢れた気分がよく出ている。明るい陽光に満ちたカリフォルニアを知ったことがウィーンに戻ってからのボルツマンを鬱状態にし、発作的な自殺の原因となったという意見すら述べられている。

しばらく空白だったその講座を埋めたのが、1922年にベルリンから移ってきたモーリツ・シュリックである。彼はプランクのもとで学位を取り、アインシュタインの同世代で、相対性理論を最初に哲学的研究の対象としたことで知られていた。リベラルではあったが師のプランクに似て貴族的で非政治的な人物であったにも関わらず、その就任に際しては多くの妨害があったといわれている。哲学の教授連も、いずれも大物理学者であったマッハやボルツマンの後任という条件のためにシュリックの物理学者としてのキャリアを無視できなかったのであろう。たとえ穏健な人物であったとしても、シュリックの正教授就任は反形而上学、反思弁哲学の実証主義者に勇気を与えた。

(同じころ、ライヘンバッハの就任をめぐるベルリンで同様なことが起こっていた。伝統的な哲学を批判し、学生時代に活動家であった彼の就任に反対する哲学科教授は多かった。しかし、アインシュタインの熱心な推挙で就任は実現した。アインシュタインは「哲学者はライヘンバッハひとりで十分」と

まで言っただと伝えられている。しかし、このライヘンバッハも1933年にはヒトラーに追われて、イスタンブール、そしてカリフォルニアへ移る。)

シュリック以外には、1918年から38年までの20年間に、ウィーン大学哲学部に在籍した「論理実証主義者」はカルナップ (1926—31) とクラフト (1914—38) だけであり、しかも正教授ではなく私講師であった。あとはフリードリヒ・ワイスマンが31年からシュリックの死までの5年間、彼のライブラリアンを勤めたに過ぎない。5年間しかいなかったカルナップを入れてもわずかに3名である。(メンガーやケルゼン、そしてハーンといった人々は法律や数学の人であった。)

こうして、プラハ、パリ、ロンドン、ボストンで史上有名となった国際会議を組織し、ラッセル、アインシュタイン、ボーアといった当代の大学者から一目も二目も置かれていたウィーン学派も、ウィーン大学およびウィーンの学問世界では、ほとんど無視された存在であったことがわかる。

このようなグループの活動が、どのようにして、あれほどまでの影響力をもつに至ったか、という問題が提起される。それも、彼らの母国語の世界ではなく、異国の亡命先、アングロ・サクソンの学問世界でほとんど科学哲学の主流を形成したのである。彼らの業績はおおよそマスコミ受けしないアカデミックなものであった。ほとんど唯一の例外がライヘンバッハの『科学哲学の形成』であろうが、それも50年代のマッカーシズムに反対するという意味をもっていた。(ライヘンバッハはカルナップを UCLA に呼ぼうとしたが、その少し前にカリフォルニア州が州立大学就任に当たって宣誓を要求するようになったため、カルナップが拒否したという話が伝えられている。)

実際に産業や軍事に貢献した亡命科学技術者の場合ならば理解できる。しかし、ここで取り上げられているのは、難解で、反権威的な亡命哲学者たちである。彼らの存在の社会的意味を考察することでわれわれが提起した問題に接近することが出来るだろう。

次号以下で、社会的活動という点でもっとも存在感があったノイラートの生涯を追い、次いで彼が関与した理論的課題について考えよう。(以下次号)

〈主要文献資料〉

このノートのために利用した主要文献は以下のとおり。ここに挙げなかったものは補注に記載した。

[N69] Otto Neurath, Rudolf Carnap, and Charles Morris (ed.), *Foundations of the Unity of Science* 2 vols, University of Chicago UP, 1969

ノイラートの構想は、ディドロの「フランス百科全書」の現代版として200巻にものぼるものであったが、彼の死で挫折し、カルナップ等によって、その一部が2巻の論文集にまとめられた。

[N73] Marie Neurath and Robert S. Cohen (ed.), *Otto Neurath, Empiricism and Sociology*, 1973

Vienna Circle Collection の第1巻で、青年期のものを含むノイラートの主要著作の英訳と関係者の回想、略年譜などを収める。

[U91] Thomas E. Uebel, *Rediscovering the Forgotten Vienna Circle*, Kluwer, 1991

ボストン大学から出ている科学哲学のシリーズの一冊。ノイラートを多面的に取り上げた論文集。

[H93] Gerald Holton, *Science and Anti-Science*, Harvard UP, 1993

ホルトンの論文集であるが、前半でウィーン学派を扱い、そのアメリカへの移転に関する興味ある記述がある。

[S93] Friedlich Stadler (ed.), *Scientific Philosophy: Origins and Developments*, Kluwer, 1993

Wiener Kreis Institute Yearbook の第1巻。本文中で言及した、91年秋のシンポジウムの記録。

[S96] Elisabeth Nemeth and Friedlich Stadler (ed.), *Encyclopedia and Utopia*, Kluwer, 1996

Wiener Kreis Institute Yearbook の第4巻。ノイラートに関するシンポジウムの報告論文を集める。

[C96] Nancy Cartwright, Jordi Cat, Lola Fleck, and Thomas E. Uebel, *Otto Neurath: Philosophy between Science and Politics*, Cambridge UP, 1996

本格的なノイラートの伝記としては最新のもの。

[G96] Ronald N. Giere and Alan W. Richardson (ed.), *Origins of Logical Empiricism*, Minnesota UP, 1996

このテーマに関する最新の論文集である。

[E1930s] Rudolf Carnap and Hans Reichenbach (ed.), *die Erkenntnis*, 8 vols Reprint of the Journal 1930-38.

ウィーン学派の学術的機関誌でナチスのオーストリア併合で中断するまでの号の復刻版。

Wiener Kreis Institute のホームページ：<http://hhobel.phl.univie.ac.at/wk>

〈補注〉

第1章

- 1) A. Einstein, Zum Quantensatz von Sommerfeld und Epstein. *Deutsche Physikalische Gesellschaft, Verhandlungen*, XIX, 82-92, 1917.
- 2) とりあえず口頭で報告した。後藤邦夫「アインシュタインの量子条件とその周辺」日本科学史学会1999年度年会, 1999年5月23日。
- 3) 以下の論文は興味深い。R.S. Cohen, Dialectical Materialism and Carnap's Logical Empiricism, in "The Philosophy of Rudolf Carnap" 1963
- 4) 塩沢由典「合理化と計画化—危機の時代の社会科学」岩波講座社会科学2巻
- 5) この協会については, <http://hhobel.phl.univie.ac.at/wk> で詳しく知ることが出来る。このホームページは多くの科学史・科学哲学の学会や研究機関とリンクしている。オランダの Haalem にあるノイラート資料に関する情報もある。
- 6) 今では日本語版レーニン全集で簡単に読める『唯物論と経験批判論』を当時日本語で読むのは容易ではなかった。佐野文夫訳の戦前の岩波文庫の3巻本は稀に古書店で見かけても高価で手が届かず, 永田広志の訳は前半が出ただけで中断した。私がとりあえず通読したのは, 戦前の改造文庫版(荒畑寒村訳)である。その後, 特別なルートでソ連で出た英訳本を安く入手し不明の箇所を確かめたりした。
- 7) マッハ(青木一郎訳)『力学の発達とその歴史的批判的考察』内田老鶴圃, 昭和6年初版。私が神保町の角にあった巖松堂で見付けたのは昭和16年刊行の第3版である。(底本はマッハの没後に出た原著の第8版) この本の終りの方で, マッハは理論が経験に先行することを明確に述べていた。ただ, その理論が先験的・神秘的なものであってはならず, 思考経済の原則に基づく人間の活動の所産であるとした。厳密な幾何学的図形や複雑な数式が自然の中に存在するはずがないだろう, ということである。

敗戦直後の東大の学生活動家の回想録「一・九会文集」の第3集に友人の鈴木正也は1948年頃の一高の社会科学研究会についての回想のなかで次のように記録した。(110ページ)「レーニン「唯物論と経験批判論」が話題になったことがある。後藤は、物理学を勉強していると、正直いってマッハの方が正しいと思う、といったことがある。南雲も唯物史観に近づいたのはボグダーノフの戦前版「プロレタリア文化について」を読んだのが切っ掛けだった。」ここに南雲とあるのは、やはり寮の同室の友人で、心理学から医学に転じ精神科医となった南雲与志郎である。

- 8) ホグベン (寿岳文章, 林達夫, 南博, 平田寛訳『コミュニケーションの歴史』岩波書店1958年。しかし、当時の日本の出版事情ではやむを得なかったのかも知れない。
- 9) フランク (矢野健太郎訳)『アインシュタイン』岩波書店1951年。原典は1947年発行。フランクのドイツ語草稿を物理学者ローゼンが英訳し、日系アメリカ人物理学者クサカが編集したもの。
- 10) ローゼンフェルト (坂田, 小此木, 後藤訳)「相補性をめぐる争い」『科学』(岩波書店) 1955年6月号, 7月号。
- 11) H.Reichenbach, *Philosophische Grundlagen der Quantenmechanik*, 1951
- 12) Paulette Fevrier の *La Structure des Theories Physiques* はそれほど丁寧に読んだわけではないが、一応は知っていた。Jean-Louis Destouches について後日高林は「現代に残るスコラ哲学者」と評した。
- 13) Anton Pannekoek, *Lenin as Philosopher*, London 1975. 1938年にドイツ語で出版された。英語版はニューヨークで1948年に出版。新版には、パンネクックの短い評伝がついている。
- 14) 後にも触れることになるが、1929年の「科学的世界把握：ウイーン学派」を読むと、執筆者(カルナップとノイラート)が「共産党宣言」を意識していたことを示す部分が随所に見られる。
- 15) 江藤文夫／鶴見俊輔／山本明編集『コミュニケーション史 講座コミュニケーション2』研究社 1973年。
- 16) ウイーン学派と政治とのかかわりを過小評価しようとする傾向は、日本語にも訳されたハンディな概説書、クラフトの『ウイーン学団』にも見られる。Viktor Kraft, *Der Wiener Kreis*, 1950. (1968年に再版) クラフトは、シュリックに近いリベラル派で、共産主義者や社会主義者をふくむ「左派」のカルナップ、ノイラート、ツィルゼルらとの間には立場や見解の相違があった。また、1950年代

のアメリカはマッカーシズムの最盛期であった。フランクがF B I に目をつけられたとき、皮肉にも『唯物論と経験批判論』のなかでレーニンに攻撃されていることがわかって免れたエピソードは有名である。クラフトが1950年という時点で、反ファシストのイメージが強く哲学界では異端児的存在だったノイラートを警戒し、論理実証主義の非政治性を強調したのは理解できる。

17) [N 73] p.56

第2章

18) A. Janik and S. Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, 1973

S. トゥールミン/A. ジャニク (藤村龍雄訳) 『ウィットゲンシュタインのウィーン』TBSブリタニカ, 1978

19) 矢田俊隆『オーストリア現代史の教訓』刀水書房, 1995

戦間期のオーストリアに関してはこの書物に収められた諸論文の記述に多くを負っている。

20) ウィンストン・チャーチル (広瀬, 村上, 内山訳) 『世界大戦』全9巻, 昭和12年

ノーベル賞の対象になった『第二次大戦史』ではなく, 第1次大戦を扱った *World Crisis* の訳書である。第1巻にはハプスブルグ帝国末期の状況が, 第8巻にはベルサイユ体制成立期中の中欧とバルカンの情勢が述べられている。(訳書の日本語の仮名づかい等は直してある。)

21) ヴァルガ (黒部明訳) 『社会民主主義諸政党』希望閣, 昭和4年。

22) 矢田も, オットー・バウアーを引用しつつ, 敗北したウィーンの労働者の栄光について述べている。矢田, 前掲書。矢田は, 断固とした逆クーデターで社会民主党が勝利した可能性に言及している。しかし, 1940年にはどうなったであろうか。

23) Friedlich Stadler, *Aspects of the Social Background and Position of the Vienna Circle at the University of Vienna* [U91] pp. 51-77

A Note on Otto Neurath(1)

Kunio GOTO

Otto Neurath is a famous Logical Positivist and is known as one of the most active representatives of the Vienna Circle, which was a group of eminent scholars of philosophy of science in the period between the two World Wars. Neurath was also known as an active member of the Social Democrats, and he believed the possibility of the “Planned Economy without Money”. This note deals with Otto Neurath and his colleagues in a social context, i.e., in the background of the social movement in Central Europe. One of the aim of this note is to reveal the strong sociopolitical concern and social practice of some core members of the Vienna Circle.

This writer begins with recalling his personal memory on the Vienna Circle since he read Mach's famous book on history of mechanics in 1948, when the writer was trying to enter the physicists' community. As a graduate student of Physics Institute of Magoya University, the writer often had contact with the Vienna Circle, when he learnt the philosophical aspect of Relativity and Quantum Mechanics, and Lancelot Hogben's book, “*From Cave Painting to Comic Strip*”, in which Hogben wrote the book owed to Otto Neurath. On their sociopolitical aspect, they were only recognized as an adversary of Leninism.

The second chapter of this note is a brief description of the social and intellectual atmosphere of Vienna in the rise and fall of the First Austrian Republic since the collapse of the Hapsburg Empire. It

makes clear that the figures of the Vienna Circle belonged to a minor group in the University of Vienna. They were acknowledged as liberals and socialists in intellectuals of “the Red Vienna”, but were underestimated in the University. How had this minor group the great influence to the contemporary philosophy of science? The answer is to be sought in the coming part of the note by giving a sketch of the work of Otto Neurach.